国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成28年8月1日発行　第40巻第8号通巻第467号

月刊みんぱく

2016 8月号

特集

「負」の遺産

時の流れにあらがいつづける遺産　竹沢尚一郎
水俣病資料館の展示リニューアル　平井京之介
南京を語ることば　川瀬由高
原爆遺構・被爆品とともに「平和」を考える　楊小平
ダークツーリズムという旅　井出明

エッセイ　千字文

シルクロードの日本人伝説

嶌 信彦

小さい頃から中国大陸、中央アジア、シルクロード――といった言葉に夢やロマンを感じていた。私が一九四二年に中国で生まれ、一年ほど上海で暮らしたことや、父も新聞記者で中国やアジア地域を駆け巡り、時々取材の話などを聞いていたためだろう。私と母は敗戦間近の一九四四年末に帰国しているが中国滞在中の記憶は全くない。時々、中国にいた頃の写真を見て記憶を辿るのだが何も覚えていない。

母は、当時としては飛んでいる女性だった。女子専門学校を卒業後、京都のデパートの宣伝部に勤務。アメリカ行きを望んだが日米関係悪化により北京へ渡り、北京の中学校で中国人に日本語等を教えていた。そこで父と知り合い結婚したが、今風に言えば〝デキちゃった婚〟だったのではないかと思っている。

そんな家庭環境もありわが家には中国関係の書籍がかなり多く、それらの背表紙を見ているうちに興味をもったように思う。宮崎滔天の『三十三年の夢』やヘディンの『さまよえる湖』などを読み、ますます大陸にロマンを感ずるようになった。

中国には記者となり、一九七〇年代に初めて訪問。以来、仕事や旅行で三〜四年に一回は訪れたが中央アジアはまだ遠かった。ウズベキスタンに初めて足を踏み入れたのは九六年。アジア開発銀行の総裁を務めた千野忠男さん（元大蔵省財務官）の話を聞き、俄然興味が湧いた。ウズベクは九一年にソ連から独立し、国家づくりのモデルを日本に求めたという。若い志士たちが奔走し途上国から近代国家をつくり、欧米先進国に追いついた歴史を知り〝見習うべきは日本だ〟と思ったようだ。

ウズベクは数千年前から欧州と中国をつなぐ真ん中に位置し、東西の文物、文化、学問、人間の交流の結節点にあった。天文学や数学、織物文化などに優れ、欧州やインド、ペルシャ、トルコ、中国、モンゴル、ロシア人などとの交易が盛んで、一五世紀の大航海時代が来るまでは世界の文化の中心的存在だった。しかしその後、鉄道や飛行機、宇宙の時代が到来するにつれ中央アジアの存在感は薄れてゆく。

日本との関係では第二次大戦後、満州で捕虜となった日本の航空工兵が首都のタシケントに、ソ連の四大オペラハウスといわれるナボイ劇場をウズベク人と共に四七年に完成させ、その伝説的秘話が語り継がれてきた。六六年にタシケント市が全壊する大地震に襲われるが、ナボイ劇場は凛としてその美しい姿をとどめた。そして、中央アジア全体に日本人の仕事ぶりや勤勉さ、美徳が伝えられ、有名な観光的建物となった。捕虜になっても後世に恥を残さないような建物を作ろうと決意し、完成させた約五百名の日本兵の伝説が今なお伝えられているのである。

プロフィール
1942年中国・南京生まれ。慶応大学経済学部卒業後、毎日新聞社入社。東京本社経済部、ワシントン特派員等を経て1987年からフリーに。TBSテレビ「ブロードキャスター」「朝ズバッ!」等出演。現在はTBSラジオ「森本毅郎・スタンバイ!」他、多数出演。著書『日本兵捕虜はシルクロードにオペラハウスを建てた』（角川書店）等多数。

月刊 みんぱく

8月号目次

1　エッセイ　千字文
シルクロードの日本人伝説
嶌 信彦

特集「「負」の遺産

2　時の流れにあらがいつづける遺産
竹沢 尚一郎

4　水俣病資料館の展示リニューアル
平井 京之介

5　南京を語ることば
川瀬 由高

7　原爆遺構・被爆品とともに「平和」を考える
――ヒロシマの国際化・観光化
楊 小平

8　ダークツーリズムという旅
井出 明

10　○○してみました世界のフィールド
ソウルの巨大デモ
太田 心平

12　みんぱく Information

14　味の根っこ
羊肉泡
今中 崇文

16　文化遺産おもてうら
幻想が作り出す「伝統」
――インドの「野外美術館」
豊山 亜希

18　手芸考
「アイヌ刺しゅう」の担い手たち
齋藤 玲子

20　ながなんちゃ
暗黒物質!　なんなんちゃ?
身内 賢太朗

21　次号予告・編集後記

特集

「負」の遺産

人類の歩んできた歴史は、輝かしいものだけではない。消し去り、封じ込めたいような惨禍の記憶と痕跡。それらを過去からの教訓、警鐘を告げる「負」の遺産として向き合うことが、よりよい未来へとつながっていくのではないか。

時の流れにあらがいつづける遺産

竹沢尚一郎　民博 民族文化研究部

悲惨な出来事の記憶

「負」の遺産とはなにか。人類の歴史において生じた、戦争や自然災害、公害などの大規模で不幸な出来事の記憶を今に伝える施設や遺構。それが「負」の遺産であると定義することができるだろう。

そのようなものとしての「負」の遺産は、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ収容所や広島の原爆ドームのように、戦争がもたらした惨劇を今に伝えるものであることもあれば、スマトラ島沖地震や東日本大震災が残した破壊された建物や施設のように、自然の威力とそこで生じた悲劇を思い知らせるものであることもあるだろう。あるいは、有機水銀に汚染された水を垂れ流すことで何万もの水銀中毒被害をもたらした水俣市のチッソの百間排水口であるし、毎年のように多くのアフリカ人を積み出したセネガル・ゴレ島のような奴隷貿易の基地であったりもするだろう。

これらの施設や遺構のいくつかは、アウシュヴィッツや原爆ドームやゴレ島がそうであるようにユネスコの世界遺産に登録され、毎年多くの訪問者を受け入れている。それだけでなく、外国人観光客に対するアンケートで広島の原爆ドームと平和資料館が一位に挙げられることもあるなど、ぬぐいがたい印象を与える施設なのである。

日本には寺院や施設などの壮麗な建造物が数多くあるにもかかわらず、一見地味な「負」の遺産がそれほど強烈な印象を与えることができるのはなぜなのか。ギリシャのアクロポリスのように人類の悠久の歴史と遠い過去の記憶を呼び覚ましてくれる他の遺産に対し、「負」の遺産はどのような固有の性格をもっているのだろうか。

喚起する力

特徴の第一は、施設を遺産として保存するにあたって多くの議論を喚起したし、今なお喚起しつづけていることである。戦後一〇年間雨ざらしになっていた広島の旧産業奨励館が取り壊されそうになったとき、市民による保存運動によってようやくその保存が決定されたのだが、家族や友人を原爆で失った市民のあいだには保存に反対する声が多かったのも事実である。東日本大震災の遺構についても同じであり、多くの犠牲者を出した石巻市の旧大川小学校や岩手県大槌町の旧役場などは保存か解体かで議論がわかれ、いまなお結論は出ていない。また、原爆で亡くなった犠牲者の五〜一〇人に一人は朝鮮半島出身者であったとされるが、彼らを慰霊する韓国人原爆犠牲者慰霊碑が平和公園の外に置かれているなどの問題は解決を見ていないのである。

特徴の第二は、人類史のなかの一コマとして過去の出来事を記憶のなかに位置づける他の遺産と異なり、強い喚起力や不安を引き起こす力をもっているがゆえに、記憶のなかに安置させることを許さない点である。アウシュヴィッツに陳列されているユダヤ人から切り取った膨大な量の髪の毛や、広島の資料館におかれた熱で融解したガラスや黒焦げの弁当箱を目の前にした人間は、そうした出来事が二度と生じてはならないこと、そのためには自分はどうすべきかという思いを強くもたされるだろう。その意味で「負」の遺産とは、さまざまな出来事を時間軸に沿って位置づけることで忘却へと導くのではなく、ひとつの出来事を意識のなかに屹立させ、時間の流れにあらがわせることで、見る者を自己への問いかけへと促すものなのである。

広島の原爆ドームを訪れたオバマ大統領が、核ミサイルの発射装置を携えていたと一部に報道されているように、世界は矛盾に満ち、悲惨は消えることがない。それだからこそ、「負」の遺産はわたしたちに警告と危険を告げるものとしてそこに存在しつづけるのだろう。

保存か解体かをめぐって多くの議論が生じている岩手県大槌町旧役場

アウシュヴィッツ＝ビルケナウには、多くの死をもたらしたガス室の跡が残されている

パリのショアー記念館には、収容所から運んできた灰を収めるためのダビデの星をかたどった大きな石が安置されている（ホロコーストの犠牲者には骨が残されていないため）

アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所へと多くの収容者を運んだ鉄道引き込み線

水俣病資料館の展示リニューアル

平井京之介（ひらい きょうのすけ）　民博 民族社会研究部

展示場内部

今年、水俣病が公式確認されてから六〇年になる。これにあわせて、熊本県水俣市にある水俣市立水俣病資料館が展示をリニューアルさせた。設立から二〇数年を経て、はじめての全面的な改定である。

リニューアルの前と後

わたしはこれまで、この資料館の展示をさまざまな角度から批判してきた。水俣病の「科学的」「専門的」な知識を提供することにこだわり、来館者の半数以上を占める子どもたちに伝わる内容になっていない。被害者の経験や記憶が無視されている。行政は被害の拡大に責任があるはずだが、裁判の確定判決だけを提示して、自らは反省を示していない。水俣病事件全体を過去の出来事として語り、公害の克服や「環境モデル都市水俣」という現在の水俣市が目指すイメージを強調して伝えている、等々だ。

リニューアルを経て、これらの問題の多くは改善された。メインとなる概要展示の解説は小学校高学年でもわかるくらい平易になった。人びとの以前の暮らし、被害に遭って困窮する姿、受けた差別や偏見、償いを求める運動など、被害者の経験や記憶に焦点を当てる新コーナーが展示のかなりの部分を占めている。また、被害者が語りかける映像や体験コーナーは、被害の苦しみを自分のこととして考えるように来館者に促している。元気だったときの犠牲者の写真を並べた「永遠の記憶」と題する半円形のコーナーは、慰霊や追悼ができる空間を形作っている。全体として、いまだ行政の見解や方針が展示の基調になってはいるが、大人向けの詳細解説では、一部それとは異なる少数意見も紹介されている。

感覚障害の体験コーナー

展示を通じた対話

じつは今回の展示リニューアルには、わたしも一部かかわった。基本設計の段階で、熊本県や水俣市の職員、被害者、支援者とともに、専門家会議のメンバーに加えてもらったのだ。

議論が進んでいくなかで、水俣病を伝えることの難しさを改めて痛感した。水俣病の定義、得られる教訓、行政の責任等々について、資料館の運営主体である行政と、被害者や支援者とのあいだに、埋めようのない認識の溝が存在することが明らかになったのだ。おそらくこの溝は会議のメンバーだけのものでなく、地域の人びとのあいだに広く存在する溝なのだろう。

「永遠の記憶」のコーナー

それでも二年ものあいだ、立場の異なる人びとが定期的に集まり水俣病について熱い議論を交わしたことは、相互に対話を進める貴重な機会となった。その成果は展示にも確実に活かされている。実施設計や解説文の作成には参加させてもらえず、わたしの意見が十分に反映されたとは思っていないが、それでもできあがった展示をみて、かなりの達成感があった。

少し遠いけれど、ぜひ、新しくなった水俣病資料館をのぞいて欲しい。批判は甘んじて受けたいと思う。

南京を語ることば

川瀬由高（かわせ よしたか）　首都大学東京大学院博士後期課程

南京大虐殺紀念館の平和公園

意外に思われるかもしれないが、南京を訪れた日本人は、「大虐殺紀念館は思ったより良かった」としばしば口にする。南京大虐殺紀念館（侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館）では、よくメディアで報道されるような日本軍の侵略や残虐行為のみならず、鎮魂のメッセージや平和への祈り、そして戦後の日中友好の取り組みなどに配慮した展示がなされているからである。また、この紀念館には展示場とほぼ同じ大きさの面積をもつ平和公園が併設されていることも、日本ではほとんど知られていないだろう。南京大虐殺紀念館は、「愛国」や「抗日」を色濃く反映させた中国国内の他の施設と比べると、よりユニバーサルな価値を志向するミュージアムだといえるかもしれない。

一二月一三日の焦点化

一方で同紀念館は、一九三七年の南京での悲痛な記憶を展示する博物館であるだけでなく、その記憶を「人民の歴史」として表象するナショナルな性格をもった博物館でもある。その来館

南京大虐殺紀念館の平和公園

者数は年間八〇〇万にのぼるというが、これは負の歴史記憶をめぐるダークツーリズムの興隆をしめすのみならず、中国式の愛国主義を鼓舞するいわゆるレッドツーリズムの様相を呈しているともいえる。事実、観光客のなかには中国の国旗を手にしながら参観する者も少なくない。

　さらに近年、同紀念館にはあらたな政治的重要性が付与された。二〇一四年からは、南京陥落日である一二月一三日を、南京事件における犠牲者（死難者）を弔う国家行事をおこなう日とすることが定められた。さらに二〇一五年一二月には、新館として、慰安婦問題を取り上げた施設と、「ファシズムに対する勝利」を主題とする歴史展示施設のふたつがオープンした。かつてダンカン・キャメロンは、ミュージアムは特定の記憶を固定化させる場としてではなく、個々人にあらたな問いと思索を投げかける場へと変革すべきだと述べていたが、近年の南京をめぐることばは、その逆の方向へと歩みを押し進めるものであるかのようである。

上：紀念館の外観
中：12月13日の日付が刻まれたモニュメント
下：新設された南京利済巷慰安所旧址陳列館

ローカルな記憶

　二〇一四年一二月一三日、習近平主席が同紀念館を訪れた際におこなわれた第一回国家追悼式の模様は全国放送され、筆者の調査村でも話題となった。だがそのとき、筆者とともにテレビを囲んでいた村人から投げかけられたことばのうち、もっとも熱がこもっていたのは、「日本の教科書に記載があるか」といった話題ではなく、ローカルな痛みの記憶に関するものであった。じつは、この村が位置するのは高淳という南京市の最南端の行政区であるが、ここは日本軍の「南京への道」の行軍ルートにあたっており、同村もまた、「一二月一三日」に先立つこと一週間ほど前に、放火・殺人の被害をうけていたのであった。

　先日、調査村を二か月ぶりに再訪した折、当時の被害の様子をもっとも詳しく教えてくれた方の訃報を聞き、愕然とした。高齢化が進み、庶民がうけた苦痛とその記憶が失われてしまう前に、彼から、そして村人からの友情に報いたい。一人の日本人人類学者として、高淳の地元の人びと一人ひとりのことばにじっくりと耳を傾けていきたいとの思いを強くした。

最寄り駅での国旗販売の様子

原爆遺構・被爆品とともに「平和」を考える
——ヒロシマの国際化・観光化

楊小平（やん しゃおぴん）
広島大学大学院外国人客員研究員

原爆ドーム（1996年12月にユネスコの世界遺産リストに登録された）

原爆遺構と記念施設が文化遺産に

　一九九六年一二月、旧広島県産業奨励館（原爆ドーム）が、核兵器廃絶と人類の平和を求める誓いのシンボルとしてユネスコの世界遺産一覧に登録された。英語の正式名称は「Hiroshima Peace Memorial」となった。二〇〇六年には、広島平和記念都市建設法に基づいて一九五五年に開館した広島平和記念資料館の西館（現在「本館」）が、第二次世界大戦後の建築物としては最初の重要文化財に指定された。この年一〇月に、わたしは中国人留学生として広島大学に入り、間もなくして原爆ドームと広島平和記念資料館を訪ねた。広島平和記念公園の和やかな雰囲気と被爆品の凄まじい惨状のあいだに、わたしは〈いま〉と〈かこ〉が混じり合う世界に吸い込まれ、「負」の遺産をとおして「原爆」と「平和」を問い始めた。

「負」の遺産と「平和」のあいだ

　一九四五年八月六日、原子爆弾の投下により、多くの死傷者とともに広島の街は廃墟となり、軍都としての広島はその歴史を閉じることとなる。原爆ドームと広島平和記念資料館の本館に展示されている弁当箱や下駄などの被爆品を見ることをとおして、わたしは死や生きる苦しみ、悲しみ等の原爆体験の「負」の意味を体感することとなった。そして同時に、かつて学んだ日本から爆撃を受けた重慶の惨状も脳裏に浮んだ。広島の「負」の遺産への旅は、歴史を知るという行為のなか、ヒロシマとの出会いと自らの平和への思いを同時に進行させることなのである。

　広島平和記念公園は、「平和記念都市建設法」（一九四九年）に基づいて平和記念都市の象徴として整備されていった。そのなかで、原爆遺構や被爆品が〝生き証人〟となり、「広島の悲劇」が人類全体におよびうる危機としてとらえられ、「核廃絶と恒久平和」の追求が世界へと広がった。原爆と平和へ関心をもって、広島は国内外を問わず多くの訪問者を集めている。

広島平和記念公園。被爆70年にあたる2015年の5月に開催されたフラワーフェスティバルでは、花で「70」の数字が描かれた

「平和」を考える場

　世界最大の旅行口コミサイト、トリップアドバイザーにより、広島平和記念資料館は二〇一二年、二〇一三年と二年連続で外国人に人気の日本の観光スポット一位に、二〇一四年、二〇一

広島平和記念資料館でピースボランティアガイドが来訪者に折り鶴の方法を教える

五年には同一位に選ばれた。実際、一九四七年に「原爆十景」が選定され、広島を観光都市とする目標が掲げられて以来、一九七〇年代の終わりごろから平和記念資料館への修学旅行が急増した。現在、年間訪問者は一〇〇万人を超え、そのなかで外国人が二〇万人以上を占める。訪問者からは「改めて平和の大事さを学んだ」「核廃絶への力になりたい」との共感の声、または「被爆者のケロイドをみて、心が痛くなったが、日本の侵略戦争によって亡くなった人びとへの哀悼が見当たらなかったのが残念」等々の意見が聞かれるが、「負」の遺産としての被爆遺構・被爆品が、人びとに「平和」を考える場を与えていることには間違いない。

五月二七日、オバマ米大統領が歴代大統領として初めて広島を訪問し、広島平和記念資料館を見学、広島原爆死没者慰霊碑前で演説をおこなった。慰霊碑前で被爆者と抱擁する写真が大いに報道された。このことは、広島のもつ政治的な意味を示すと同時に、改めて時代とともに原爆遺構や被爆品等の存立の意義をあらわしている。原爆遺構・被爆品とともに、核兵器への警鐘にとどまらず、戦争への反省、和解、また「平和」を考えることもまた可能なのである。

ダークツーリズムという旅

井出（いで） 明（あきら）
追手門学院大学准教授

ノルマンディー上陸作戦の激戦地であったカーンの平和記念館に佇む筆者

悲しみの記憶をめぐる旅

編集部からは――「負」の遺産を旅するというテーマでお願いします――とご依頼をいただいたが、じつはこの〝「負」の遺産〟という概念は非常に難しい問題を含んでいる。

〝遺産〟といった場合、日本語ではなにか親から財産を受け継ぐように感じられるが、当然のことながら親が債務を残す可能性もあるわけで、必ずしも相続がプラスになるわけではない。そしてこれは、文化の承継にも当てはまる。

例えば、ヨーロッパの教会には、キリストの誕生と死を描いた彫像や絵画が置かれているし、教会芸術のテーマはそもそも〝天国と地獄〟や〝天使と悪魔〟といった二元論的世界が採られることが多い。キリスト教社会では、子どものころからこうした文明観に慣れ親しむため、過去から受け継ぐ記憶は、必ずしも輝かしいものばかりではないということが刷り込まれている。

戦争や災害の跡といった人類の悲しみの記憶をめぐる旅を、欧米では一般に〝ダークツーリズム（dark tourism）〟とよんでいる。この概念は二〇世紀末にイギリスのJ・レノンとM・フォーレーによって提唱され、瞬く間に世界中に広がった。アウシュヴィッツは典型的なダークツーリズムポイントであるが、ノルマンディー上陸作戦にまつわる地域やアフリカの奴隷貿易の拠点なども含まれ、そのウイングは広がりつつある。つまり、西洋社会では歴史の影の記憶を将来にわたって受け継ぎ、教訓として大切にしていこうという意識が感じ取れる。

光あるところに影あり

翻って、我が国の現状を見ると、ダークツーリズムの対象となるべき場所は数多くあるものの、日本社会は長いこと悲しみの観点から地域を掘り下げてこなかった。例えば、昨年の世界遺産登録に際し、韓国から〝強制労働〟に触れていないと物議をかもした三井三池炭鉱や軍艦島（端島）に関して、日本側からは輝かしい開発のみに焦点をあてた栄光の歴史ばかりが語られていた。

しかし、あらゆる事象には、必ず光と影の両面がある。明治日本の近代化は、殖産興業政策の下、華々しい進展を遂げたが、その一方で足尾銅山の鉱毒問題をはじめとする社会の歪（ひず）みも顕在化していった。ダークツーリズムという旅の経験は、単に地域のマイナス面をあげつらうのではなく、地域を光と影の両面から深くとらえ直すという営為にほかならない。そして、我々はダークツーリズムを通じて、過去の過ちから学び、未来への決意をあらたにしていく。単に書物だけではなく、歩きながら身を現場において考えるとき、そこには身体性に根ざした実感を獲得することができる。これだけインターネットが張りめぐらされた高度情報化社会においても、現場に身をおくことは絶対的な価値があろう。原爆ドームの前では誰もが厳粛な気持ちになるし、そこには写真集やインターネットでホームページを見るだけでは得られない魂への訴求がある。悲しみの記憶のたどり方は、文学なり芸術なり、さまざまなアプローチがあるであろうが、体を動かしながら現地でモノを考えるという方法はダークツーリズムならではの特徴であり、これは机上の学問とはまた異なる価値をもつ。みなさんも、悲しみの記憶を旅しつつ、多面的な考察力を培う楽しさを味わってみてはいかがだろう。

三井三池炭鉱の万田坑

アウシュヴィッツ収容所の入り口

〇〇してみました世界のフィールド

ソウルの巨大デモ

太田 心平（おおた しんぺい）　民博 民族文化研究部

群衆に混じってみました

サッカー日韓 W 杯の街頭応援に混じる筆者（2002 年）

デモは「暴動」か「祝祭」か。ひとつの出来事に対する人びとの認識や描き方は、視点の置きようにより千差万別である。フィールドワークによる経験は、その多面性に気づかせてくれる。

立ち上がる若者

二〇〇八年五月、ソウルにあの光景が帰ってきた。旧市街の大通りを埋め尽くす群衆の渦である。

右派政権の李明博（イミョンバク）（通称「MB」）は、左派勢力による厳しい批判を受けながらも、この年の二月、大統領に就任した。新しい政策に対する、国民の、特に若者層の反発が、日ごとに増していた。

そんななか、高校生たちが立ち上がった。直前までの左派政権では禁止されていた中高生の「零教時（ヨンギョーシ）」、つまり一時間目よりも前に生徒を登校させ教室で自習をうながすことを、MB政権が解禁したことに抗議したのだ。こうして四月の各週末には、百名以上の高校生が光化門（クワンファムン）や清渓川（チョンギェチョン）一帯でキャンドル・デモを開いた。

五月に入ると、このデモには高校生以外も参加するようになった。狂牛病問題で輸入が禁じられていた米国産牛肉の輸入再開が発表されたことで、反MBの声が高まったのである。こうして、「李明博弾劾のための汎国民運動本部」という組織がデモの運営にあたるようになった。ソウルだけではない。同じ動きは、すべての大都市へ、そして中小の都市にまで広がり、週末ごとに韓国の繁華街はデモ一色になった。いちばん流行ったスローガンは「MBアウト!」。このあたりに、イマドキの感覚がよく出ていた。

デモの実像を知るために

わたしは二〇年近く韓国の政治文化を研究している。しかし、そんなわたしにとってさえ、こうした巨大デモに参加することは慎重さを要する。実際に、日本の外務省は、旅行者を含む海外の邦人に、政治集会に近づかないよう警告している。ただ、このときは現地の専門家と一緒に行動することと、「前線」に近づかないことを条件に、研究のためデモに混じってみることとした。

わたしが気になったのは、政治色の重さと、お祭り要素という軽さのバランスである。事前に話を聞いた若者たちは、口をそろえて「六年前みたいで面白い」というようなことを言っていた。二〇〇二年の日韓ワールドカップで、大通りを埋め尽くして街頭応援がおこなわれたことと、やっていることに共通点があるというのだ。右派のマスコミも、迷惑なお祭り騒ぎだと、デモを激しく非難していた。

しかし、それならばそれで、さらに研究すべきなのである。本誌の二〇〇八年六月号でも書いたが、日韓ワールドカップの街頭応援も、結果的に国民の団結という政治的幻想に支えられていた。また、街頭応援に向かう民主化学生運動世代の人びとは、しばしば一九八〇年代のデモ現場を思い出すために、街頭応援に参加していたほどだ。いずれも、群衆のニュースを見ているだけでは伝わってこない、一人一人の実情だった。

韓国、ソウル

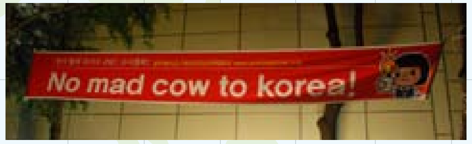
国史認識をつなぐデモ

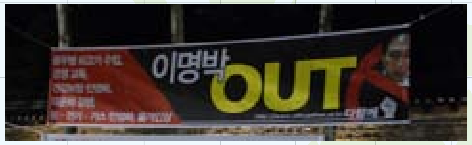
こうして六月一四日の土曜日に、わたしは一日かけて旧市街を歩き、人びとの声に耳を傾けた。厳しい面持ちでシュプレヒコールをあげる人びとから、このデモの真摯な側面は十分に伝わってきた。ただ、夜になって涼しくなると、もう少し軽い気持ちで参加する人びとが目立つようになった。友だちどうし道路に座りこみ、おしゃべりに興じる小さな集団。その合間を物売りが歩き回る。たしかに「お祭り騒ぎ」としての一面もあった。

そんな夕刻の大通りでわたしが着目したのは、中高生とその親たちのグループだった。「お父さんが大学生のころにはね」と、民主化学生運動の思い出を子どもに話す父親。「八〇年代のデモにも、娯楽要素がなかったわけじゃないのよ」と語る母親。そんな話を聞く子どもたちの、キラキラした目。

週末ごとのデモは、一年以上も続いた。強まりゆく警察による武力鎮圧と、堅調な経済政策によりデモは収束したが、国民はその光景に軍事独裁時代の再来を見た。MBの次に政権をとったのは、かつての軍事独裁政権の大統領の娘である朴槿恵（パククネ）現大統領。現政権下でも、巨大デモはしばしば起き、「民主化」以前の悪夢と比較する発言は続いている。

反MBデモは何だったのだろうか。参加者の規模でいって最盛期の民主化運動をも凌駕（りょうが）したとする分析や、暴力的な部分を指して暴動だったと非難する記録、参加者の自発性や秩序意識を称えて民主主義のバージョンアップだったという評価など、評者の思想に沿う多様な認識として、現在では人びとに記憶されている。やがて、それぞれの思想に基づく歴史の物語に吸収されていくだろう。そういうマクロな視座に立つ人びとにも、あのパパやママの思い出話や、子どもたちの目が、見えていればなと願う。わたし自身は、久しぶりにソウルで起きたあのデモを、「民主化」の前後をつなぐ伝承行為だったと位置づけている。





上：米国産牛肉の輸入再開に反対するデモを呼びかける横断幕
中：諸政策を非難する「MB アウト」の横断幕
下：警察が築いたバリケードの前で演説を聞く人びと。乳幼児を連れた人もいる

特別展
「見世物大博覧会」

本展では、江戸から明治時代にかけて大いに流行し、大正時代を経て現代に至るまで命脈を保ってきた見世物の世界を、絵看板、錦絵、一式飾りや生人形など、さまざまな資料をとおして紹介します。

会期　9月8日(木)～11月29日(火)
会場　特別展示館

絵看板(軽業・足芸一座)

■関連イベント
みんぱく×MBSラジオ presents トークイベント

タレントの浜村淳さんをお招きし、笹原亮二（本館 教授）と特別展「見世物大博覧会」の魅力に迫ります。

日程　9月10日(土)
会場　本館講堂（定員450名）

企画展
順益台湾原住民博物館所蔵・学生創作ポスター展「台湾原住民族をめぐるイメージ」

学生たちがとらえた原住民族のイメージが表現されたポスターを展示するとともに、イメージとむすびつく原住民族の物質文化を紹介します。

会期　8月4日(木)～10月4日(火)
会場　企画展示場

李翊慈「祝祭の石板――豊年祭」

中央・北アジアを駆けめぐる――夏のみんぱくフォーラム2016

◆展示場クイズ「みんぱQ」
中央・北アジア編
8月23日(火)まで

みんぱく映画会
第34回ワールドシネマ
「禁じられた歌声」

日時　9月22日(木・祝)
13時30分～16時（開場13時）
会場　本館講堂(定員450名)
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)
※入場整理券を当日11時から本館2階観覧券売場にて配布

みんぱく秋の遠足・校外学習事前見学&ガイダンス

秋の遠足・校外学習にむけて事前見学に来館される学校団体の先生方を対象としたガイダンスを開催します。

日時　8月23日(火)、25日(木)
14時～16時30分
会場　本館第5セミナー室ほか

お問い合わせ先
ホームページから参加申込書をダウンロードし、必要事項を記入の上、FAXにてお送りください。
本館 案内所
電話　06・6878・8341

インフォレストすいたでみんぱくフェア開催

エキスポシティのインフォレストすいたで、9月1日(木)～10月31日(月)まで、みんぱくフェアを開催いたします。特別展「見世物大博覧会」にまつわるミニ展示や楽器の体験、参加型のプレゼント企画などを予定しています。

みんぱくミュージアムパートナーズ
「点字体験ワークショップ」

目で読む文字から手で読む文字へ、点字で異文化コミュニケーション！ 点字体験ワークショップを開催します。

日時　8月13日(土) 12時～15時30分
会場　本館エントランスホール
※申込不要、参加無料

●夏休み観覧無料キャンペーン

夏の観覧無料キャンペーンを8月1日(月)から8月30日(火)まで実施します。対象は高校生以下と65歳以上の方です。

みんぱくブックフェア

展覧会の図録や「フィールドワーク選書」全20巻、オリジナルグッズを取りそろえます。
三省堂書店神保町本店（会場4階）
8月31日(水)まで

◆会期中にトークイベントを開催（会場8階）
「僕のフィールドワーク」論――微笑みの国の工場から

話者　平井京之介（本館 教授）
日時　8月7日(日)14時～(1時間程度／要予約)
お申込み・お問い合わせ先
三省堂書店神保町本店
03・3233・3312

※各イベントについてくわしくはみんぱくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時（土日祝を除く）です。

ビデオテーク新番組 (2016 年公開予定)

番組番号	種別	タイトル	時間
1740	短編番組	フィリピン北部バルバラサン村の音楽とくらし（英語版〈3740〉・イロカノ語版〈8034〉あり）	26 分
1741	短編番組	周城村の本主節：雲南省ペー族の祭り	19 分
1742	短編番組	雲南省ペー族の上棟式の今	20 分
1743	短編番組	安龍謝土：雲南省ペー族の家屋完成後の儀礼	22 分
8035	短編番組	Lifestyle and Views of a Landlord in a West Indian Village [Hindi version]	15 分
8036	短編番組	Mother Goddess Festival in a Rajasthan Village, India [Hindi version]	26 分
8037	短編番組	Sagas Bavji : Warrior Spirits of Rajasthan, India [Hindi version]	32 分
8038	短編番組	A Marriage in Udaipur [Hindi version]	33 分
8039	短編番組	*Holi* Festival in Udaipur [Hindi version]	20 分
7237	研究用映像	Transformation of the Mother Goddess Festival in the Mewar Region, Rajasthan, India [Hindi version]	74 分
7238	研究用映像	A Hindu Marriage in Rajasthan [Hindi version]	106 分
6047	マルチメディア番組	雲南省ペー族の暮らしと文化	—
6054	マルチメディア番組	手話の世界へようこそ！！	—

みんぱくゼミナール

時間　13時30分～15時（13時開場）
会場　本館講堂　定員　450名（当日先着順）
参加費　無料（展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です）

第459回　8月20日(土)
飛ばねぇカワウは、ただのカワウだ――鵜飼研究の魅力を語る
講師　卯田宗平（本館 准教授）

鵜飼のカワウはなぜ飛んで逃げないのか。どのような魚が獲れるのか。鵜飼にかかわるさまざまな疑問を切り口に、中国と日本の自然環境や食文化の違い、そして鵜飼研究の魅力について説明します。

みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域（国）の最新情報」「みんぱくの展示資料」について分かりやすくお話しします。4月からテーマによって実施時間が30～60分になりました。

8月7日(日) 14時30分～15時15分
本館ナビひろば
「無視覚流」の極意を求めて――ユニバーサル・ミュージアムの新展開
話者　広瀬浩二郎（本館 准教授）

8月14日(日) 14時30分～15時
本館ナビひろば
デジタル時代の原住民イメージ
話者　野林厚志（本館 教授）

8月21日(日) 14時30分～15時15分
本館ナビひろば
訪ねてみよう、手話の世界！
話者　飯泉菜穂子（本館 特任准教授）
※手話通訳つき

8月28日(日) 14時30分～15時15分
本館ナビひろば
イタリア人と食
話者　宇田川妙子（本館 准教授）
※申込不要、参加無料（要展示観覧券）

研究部新メンバー

相島葉月（あいしま はつき）　准教授（先端人類科学研究部）

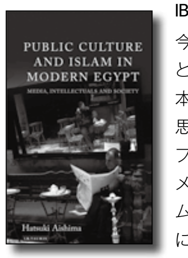
英マンチェスター大学人文学部・講師（現代イスラーム）を経て現職。専門は中東・イスラーム人類学。エジプトの空手家コミュニティを事例とした都市中流層の社会階層観やモダニティに関する研究課題を遂行中。

刊行物紹介

■岸上伸啓 編
『贈与論再考――人間はなぜ他者に与えるのか』　臨川書店　4,500円（税抜）

人類社会には様々なモノや食べ物のやりとりが存在する。そのような社会現象に関する最初の文化人類学的研究は、モースの贈与論である。本書では、霊長類や世界各地の事例を用いてモースの見解を検証しつつ、「贈与」や「交換」、「分配」という行為について再考する。

■相島葉月 著
Public Culture and Islam in Modern Egypt: Media, Intellectuals and Society (Library of Modern Middle East Studies)　**邦題：公共文化とイスラーム――メディア・知識人・社会**
IB Tauris社 £64.00（Kindle版あり）



今日のエジプトにおいて知識人であるというのはどういう意味を持つのか？本書は現代中東を代表するイスラーム思想家であるアブドゥルハリーム・マフムードの生涯、著作および公共的イメージを主題として、都市中流層ムスリムの抱く教養への憧れや公的知識人像について探求した民族誌である。

友の会

国立民族学博物館友の会　電話　06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く）　FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　　E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会（大阪）

会場　本館第5セミナー室（定員96名）
※当日先着順、会員無料（会員証提示）、一般500円

第458回　9月3日(土) 13時30分～15時30分
ネパール、「市民社会」の再編を展望する
講師　南真木人（本館 准教授）

2015年、大規模な震災に見舞われたネパール。地震発生直後には、カーストや民族、宗教、社会階層など、多様な価値観をもつ人びとの間に共同の精神が生まれ、分断されていた「市民社会」が立ち現われました。こうした契機は今回に限ったことではありません。1951年の「開国」以降、節目のたびに、社会再編の機運が、人びとのなかで高まりを見せてきたのです。本講演会では、社会の再編に至る、今までとこれからを展望します。

第459回　10月1日(土) 13時30分～15時30分
見世物の昭和・平成――人間ポンプ・安田里美のライフヒストリーから
講師　鵜飼正樹（京都文教大学 教授）

第73回体験セミナー
目と舌で知るネパール――映像鑑賞と国民食「ダール・バート」を手で食べる
9月30日(金)（開催地・東京／要事前申込）

■友の会ご入会キャンペーン【8月1日(月)～30日(火)】
期間中、新規ご入会いただいた方には、記念品をプレゼントします。

【東京】連続講座
「素顔の地球に出会う――人類学者たちのフィールドワーク」
会場　モンベル渋谷店5Fサロン
時間　各回ともに13時30分～15時30分
参加費　一般各回1000円、会員無料
要事前申込、先着順

9月10日(土)
人間にとってスイカとは何か――カラハリ狩猟民と考える
講師　池谷和信（本館 教授）

11月12日(土)
シベリアで生命の暖かさを感じる
講師　佐々木史郎（国立アイヌ民族博物館設立準備室 主幹）

味の根っこ

西安の名物料理

羊肉泡（ヤンロウパオ）

今中 崇文　民博 外来研究員

できあがった羊肉泡

西安の名物料理

かつて唐の時代に「長安」とよばれた、中国の西北部にある都市、西安市の名物料理に「羊肉泡饃」というものがある。牛を材料とするものもあるので、あわせて「牛羊肉泡饃」とも記されるが、地元の人びとは略して「羊肉泡」とよんでいる。西安市を中心とする陝西省一帯に伝わる伝統的な食文化は、総称して陝西料理とよばれているが、その知名度はあまり高いとはいえず、中国を代表する「四大料理」や「八大料理」のひとつとして挙げられることはない。わずかに餃子や麺類といった「小吃」（＝軽食）が知られるぐらいであるが、そのなかでも抜群の知名度を誇るのが、この羊肉泡である。

手間ひまかけてこそ

羊肉泡とは、小麦粉をこねてつくった「飥飥饃」（以下、モーと記す）を細かくちぎり、それを羊の肉や骨に各種調味料を加えてとった濃厚なスープで煮込み、そこに柔らかく煮込んだ羊肉や太めの春雨、ニンニクの若芽を加えた料理である。ただし、これを口にするまでには、ひと手間もふた手間もかかる。

店に入ると、席に着く前に注文をする。羊肉にするのか牛肉にするのか、肉は並にするのか上にするのか、さらにはモーを何枚にするのかを選んでお金を払う。すると、付け合せの「香菜」（中国パセリ）と「糖蒜」（ニンニクの甘酢漬け）・「辣子醤」（唐辛子味噌）とともに、モーの入った丼だけが渡される。

客が席に着いても、店員は動こうとしない。渡されたモーは、客がそれぞれに自分の手でちぎるのだ。ちぎるのは細かければ細かいほどいいとされ、ほとんどの人が雑談をしながらのんびりと手を動かしている。モーのちぎり方が粗いと、店員にもっと細かくちぎるように指導されることもある。近年、機械でモーを細かく切ってくれる店も出てきたが、西安っ子からはそれでは味気ないという声がよく聞かれる。ちぎり終わったモーは、店員によって番号札と引き換えに厨房へと運ばれ、羊肉や春雨・ニンニクの若芽とともにスープで煮込まれて戻ってくる。

このようにしてようやく口にすることができる羊肉泡であるが、その食べ方にも作法がある。

丼に入ったモー（2枚）と付け合わせの中国パセリ、ニンニクの甘酢漬け、唐辛子味噌。モーは、小麦粉に塩・水・少量のイースト菌を加えてこね、少し発酵させてから円盤状にまとめ、焼いて作る

それは、決して混ぜることなく、丼に盛られた上の方から、ちょっとずつ食べていくというものである。このような食べ方を「蚕食」とよぶ。好みで唐辛子味噌と中国パセリを加えつつ、ときにはニンニクの甘酢漬けを齧りながら、少しずつ地層を掘るように食べ進めていくと、濃厚な羊のスープがモーに少しずつ滲みていき、一口ごとに異なる食感を味わうことができるのである。

大衆料理から名物料理へ

そもそも羊肉泡は、西安に暮らすムスリムによって生み出された料理とされる。現在、人口八〇〇万人を数える西安市には、七万人近いムスリムがいるとされるが、そのほとんどが回族という少数民族の人びとである。彼らの多くは、唐の時代にシルクロードを通って、はるか西方からやって来た商人や兵士の末裔であると自認しており、周囲の漢民族と調和しながら、現在でもイスラームの信仰とそれにもとづく生活習慣を保っている。そのため、羊肉泡の老舗とよばれる店はいずれも、イスラーム法に適った食品を供する清真食堂（ハラール・レストラン）である。

回族の料理であった羊肉泡が、広く西安の人びとに受け入れられるようになったのは、その味だけでなく、経済性の高さにある。西安生まれのある老人は、「若いころ、朝に羊肉泡を食べるとどれだけ身体を動かして働いても夕方まで空腹を覚えず、たいへん便利だったんだよ。それに安くて飽きないしね」と語る。また、当時の羊肉泡を扱う店は早朝から昼ごろまでしか営業していなかったともいい、あくまでも庶民の生活を支える大衆料理として人気を博していたのである。

現在では、観光都市・西安を代表する名物料理として、「西安まで来て羊肉泡を食べないのでは、西安に来たとはいえない」といわれるまでになっている。羊肉泡を扱う店は街のいたるところにあり、営業時間も夜までという店が増え、ますます手軽に食べられるようになった。羊肉泡好きにはまことに歓迎すべき状況ではある。最近ではインスタント製品まであるが、それはさすがにやりすぎであると思う。やはり羊肉泡は、手間ひまかけてゆったりと食べるのが、その味わいの一部であるのだから。

ちぎり終わったモーは、厨房で個別の中華鍋に入れられる。そこに1人前分のスープ、羊肉、春雨、ニンニクの若芽などを加えて煮込んでいく。充分に煮込まれたら、丼に戻されて、ようやく完成となる

羊肉泡（17杯分）

羊肉	2.5kg
羊の骨	3kg
春雨（お湯で戻す）	600g
ニンニクの若芽	500g
桂皮	3g
草果（ソウカ）	6g
花椒（カショウ）	20g
ウイキョウ	40g
乾燥しょうが	3g
良姜（リョウキョウ）	10g
八角	10g
塩	60g
羊脂	150g
ミョウバン	1g

① 羊肉を切り分け、水を換えながら2時間浸け洗いする。羊の骨も1時間ほど水に浸け、水を換えて再度洗い、砕いて15cmぐらいの長さにそろえる。

② 鍋を火にかけ、7ℓの水を加えて強火で沸かし、羊の骨とミョウバンを入れる。30分ほどゆでたら、袋に入れた桂皮・草果・花椒・ウイキョウ・乾燥しょうが・良姜・八角を鍋に入れる。強火で1時間ほど煮込んだら、肉を皮目を下にして骨の上に載せ、2～3時間煮る。その後、塩をまんべんなくふりかけ、肉を上から板で押さえ、さらに蓋をして弱火で7～8時間ことことと煮込む。

③ 蓋と肉を押さえていた板を取って、アクを取り、羊肉をザルに上げる。その後、スープで肉をきれいに洗い、見た目をきれいにした上でさます。

④ 飥飥饃を細かくちぎって丼に入れ、100gずつに切った羊肉と春雨、ニンニクの若芽を載せ、煮込む準備をする。

⑤ 中華鍋に適量のスープと水を入れて温め、羊肉、春雨を入れてしばらく煮る。さらに飥飥饃とニンニクの若芽を加え、沸騰したら強火で2分ほど煮込み、羊脂を加えてさらに煮る。味の素を入れて何度か鍋を煽ったら、丼に戻してできあがり。

BORDERLESS HERITAGE

文化遺産 おもて うら

BORDERLESS HERITAGE

文化遺産の美の価値判断は、しばしば外部の目線によって決められる。そして、美術史家もその判断に参与してきた。造り手たちの「美術」を見つめ直す時が来ている。

幻想が作り出す「伝統」——インドの「野外美術館」

豊山亜希（とよやま あき）
近畿大学講師

インドの「野外美術館」人気

インド屈指の観光州ラージャスターンにあって、近年特に脚光を浴びる場所のひとつに、北東端の州境部に位置するシェーカーワーティー地方がある。観光客のお目当ては「野外美術館」とよばれる文化遺産である。これは、同地方の村々に点在する築八〇〜一八〇年ほどの商家建築の総称で、いずれも色鮮やかな壁画が描かれていることからこの名で知られるようになった。建築主は当地出身の商人集団マールワーリーで、絵で埋め尽くされた大邸宅の数々は、彼らがイギリス統治期にカルカッタやボンベイなどの都市部で商売に成功した証（あかし）である。壁画は村の陶工あるいは石工カーストの手になるもので、地元の民話やヒンドゥー神話、イギリス由来の珍しい文物といった主題が描き出されている。

「野外美術館」の一例（ビルラー邸、1864 年、ピーラーニー）

村の入り組んだ路地を歩きながらこれら無名絵師たちの「作品」を鑑賞するのは不便も伴うが、それが「本当のインドを見る」という価値へと読み換えられ、お定まりのツアーに飽き足らない旅行者を惹（ひ）きつけている。

細密画の伝統に則ってヒンドゥー叙事詩『ラーマーヤナ』の一場面を描いた壁画（ポダール家記念碑、19 世紀後半、ラームガル）

「インドの真の姿は農村にあり」とはガンディーの弁だが、急速な経済発展を続ける今、その影で失われつつある伝統への郷愁がシェーカーワーティー人気に一役買っているのは間違いない。ややうがった見方をすれば、発展から取り残されていることこそが、この地に観光資源としての重要性を担保しているのだ。

「本当のインド」のイメージ

こうした伝統主義は「作品」そのものの価値判断にも大きく作用している。壁画の主題や画風は、イギリスの支配下にあったインドの社会状況を映し出しながら変化していった。一九世紀前半にマールワーリー商人が豪邸を建て始めたころ、そこに描かれた壁画は旧来この地でおこなわれてきた細密画に倣ったものだった。時代を下るにつれて、建築主が都会で見聞した蒸気船や列車をはじめとする文明の利器が描かれるようになった。

20 世紀初頭には文明の利器（電話、自転車、四輪馬車）が描かれるようになる（ネワティア邸、1915 年、マンダーヴァー）

画風も、油彩画や写真といったあらたな視覚文化の影響を受けて、遠近法や陰影表現を駆使した写実的なものが主流となっていった。

「本当のインド」を見たいと願う「野外美術館」の鑑賞者にとって、民話や神話が細密画風に描かれた壁画ほど求めているイメージに近い。一方で、制作年代を下り近代西洋文明の発明品が写実的に描かれる度合いが増すほどに、理想から遠ざかっていく。こうした「作品」評価は、「野外美術館」という文化遺産の集合体を構成する個々の物件の価値を序列化することになる。シェーカーワーティー地方が観光地としての注目度を増すにつれ、邸宅博物館やヘリテージ・ホテルといった資源開発の恩恵で人気に拍車のかかる「勝ち組」物件と、誰にも見向きもされずに老朽化していく「負け組」物件との格差は広がるばかりである。

歴史への誇りと経済的な豊かさの両立

「負け組」物件もこのままでは終わらない。生き残りを賭けて考え出されたのが、もともとあった壁画の上に「伝統風」の壁画を描きなおし、観光客向けのレストランやホテルとして開業するという策である。経済的な豊かさに対する地元の人びとの思いは切実で、よそ者の筆者がそれをとやかく言う権利はない。しかし長い目で見て、富める国々のインド幻想におもねる上書き行為が進めば、シェーカーワーティーの人びとが自らの手で土地の歴史を歪曲化していくことになりかねない。そして、その根拠となる「作品」の価値判断に積極的に関与してきた国内外の美術史界の責任は重い。

美術史家として今筆者にできることは、「伝統風」のあらたな壁画の下に埋もれようとしている「非伝統的」な壁画群について、制作当時の文脈からその意味を明らかにすることである。現実はそう簡単ではないにせよ、「野外美術館」が近代インドの歩みを一望できる文化遺産の総体として存在意義を示すようになれば、シェーカーワーティーの人びとが、歴史への誇りと経済的な豊かさの両方を同時に叶えることが可能となるのではなかろうか。

「アイヌ刺しゅう」の担い手たち

アイヌの衣類に施されてきた刺しゅうやアップリケによる装飾は、近年はインテリアや小物などにも応用されている。作る目的や作品の種類は多様になり、作り手もアイヌのみにとどまらない。

齋藤玲子（さいとう れいこ）
民博 民族文化研究部

民博が委託事業として実施しているJICA博物館学コースにおいておこなわれた刺しゅうワークショップ（2015年）。中央が講師の山本みい子さん

アイヌの衣類や木彫品などを総称するとき、「工芸」とは言うが、「手芸」はあまり使われてこなかった。たしかに、伝統的な衣類に施されてきた装飾は手縫いであり、手芸といわれれば、そうかもしれない。また、木彫りと違い、衣類は商品としてではなく自分や家族のために作る人が多いことも、手芸的なのだろう。

アイヌの衣文化、特に儀礼用の衣服は、和服に似た衣服をはじめ鉢巻きや前掛けなどに、刺しゅうやアップリケの技法で装飾を施している。地方差はあるが、木綿衣の装飾技法は三〜四つにわけられ、よび名もそれぞれ異なる。服地に直接刺しゅうをするものと別布を衣服に重ねて縫い付けた上に刺しゅうするものとがあり、さらに別布（色でわけることもある）をテープ状にして文様をつくるものと、（白い大きな布を）切り抜いて文様をつくるものにわけられる。手に入る限られた素材を巧みに取り入れ、独特の造形が生み出されてきたのだ。これらの装飾を便宜的に「アイヌ刺しゅう」とよぶことにして、作る目的や作り手に注目しつつ、現在にいたる変遷を概観してみたい。

自家用か、売り物か

一九七〇年代ころから文化復興の気運が高まり、各地で儀式の復活や芸能交流などが増えてくると、伝統的な衣装を着る機会が多くなった。一九七一年に結成された北海道ウタリ協会札幌支部（当時）は、「支部の行事がある度に民族衣服を借りに歩く」のではなく、自分たちの手で作りたいと協会本部に働きかけ、一九八〇年に公共職業訓練として刺しゅうなどを学ぶ「織布科」の開講にこぎつけた。初期の受講生のなかには、訓練を契機に制作活動を始めたり、後に指導者となる人もいた。こうした状況は、札幌に限ったことではなく、伝統的な衣装を自らの手で作ろうという動きは道内の各地で高まっていった。

一九八〇年代半ばから後半になると、制作依頼を受けたり、個展を開く人も出てきた。たとえば、札幌駅に展示されている大型のタペストリーの作者である加藤町子氏（故人）は、一九八四年ころに道内のホテルからタペストリーなどの注文を受けて着物以外のものも作るようになり、作品を買ってもらうようになったと語っている。加藤氏の作品は「ふるさと切手」の原画に選定され（二〇〇三年）、アイヌ刺しゅうは北海道イメージのひとつとして定着しつつある。作家として名の知れた人のみならず、博物館のミュージアム・ショップや新千歳空港などの店でも刺しゅう作品の販売が増えている。

札幌駅西コンコースに「アイヌアートモニュメント」として展示されているタペストリー。2014年・加藤町子作

刺しゅうを学ぶ人たち

アイヌ刺しゅうを学ぶことのできる場も、ひろがりを見せている。（公財）アイヌ文化振興・研究推進機構や博物館などの公的な講座をはじめ、新聞社のカルチャー教室や手芸店の教室など主催も受講者も多様である。

アイヌ服飾文様研究家の津田命子（つだのぶこ）氏が出版した『伝統のアイヌ文様構成法によるアイヌ刺しゅう入門』は、そうした講座で教科書としてよく使われている。彼女のもとで学び、本に掲載する見本作成に協力し、講師として活躍する人のなかには、アイヌ刺しゅうにひかれ、長年取り組んでいるアイヌではない「和人」も少なくない。また、津田さんが講師を務める「ハンドメイド」のカルチャースクール（ヴォーグ学園札幌校）では、「アイヌ刺しゅう短期講座」の受講生の多くが道外からの参加という。

刺しゅうをきっかけに、アイヌ文化に関心をもつ人が増えるのは歓迎すべきことである。しかし、アイヌとアイヌでない人とは、刺しゅうをする目的や姿勢が異なる場合も多い。アイヌの作り手が儀礼用の衣装として、あるいは商品として作るとき、「余暇」に「趣味」でする「手芸」とはいえない。いっぽう、多くの和人にとっては、趣味以上のものにはなりにくい。

このようにアイヌ刺しゅうは、取り組む目的も、作品の種類や使い手も、そして担い手自体も多様化してきている。完成したものだけを見て、「手芸」「工芸」と線引きすることはできない。そもそも、なにをもって「アイヌ刺しゅう」とするのか、再考すべきときかもしれない。

筆者がいただいたテーブルセンター（間宮喜代子さん作）とバッグ（西田香代子さん作）。お二人とも（公社）北海道アイヌ協会主催の「北海道アイヌ伝統工芸展」で上位入賞を3回受け、認定された「優秀工芸師」で、受注制作も多い

ながなんぢゃ

暗黒物質！ なんなんぢゃ？

What's in a name?

身内賢太朗（みうち けんたろう）　神戸大学大学院准教授

「新郎は物理学の研究をされており、なかでも暗黒物質というよくわからないモノについて……（会場爆笑）」。数年前の僕の結婚式の司会の新郎紹介からこのエッセイを始めたい。僕は未発見の物質、暗黒物質の研究をしている物理の研究者だ。「暗黒物質」、一九三〇年代に「ダークマター」として宇宙の「光らないもの」に与えられた「名」は時空を超えて、人生の晴れ舞台も爆笑の渦に巻き込んでしまう存在となった。

「暗黒物質」は僕らの宇宙が形づくられて、銀河や星などが生まれることにも大きくかかわっている、重要な物質なのだが、その「暗黒」な名ゆえに「なんなんぢゃ？」となることがとても多い。「暗黒物質」はその後の研究で、「暗黒エネルギー」という兄弟分も手に入れ（両者のあいだには物理的なつながりはまったくないのにもかかわらず！）、今や宇宙の九五パーセントは「暗黒」であることがわかっている。ちなみによく似た名前の「ブラックホール」は命名されたのが一九六〇年代ということなので、元祖ダークサイドは暗黒物質であると言えるだろう。名をもらったのは暗黒物質の方が早いが、研究の速度はブラックホールの方が速く、ブラックホールの正体はほぼわかっている。

さて、件（くだん）の「暗黒物質」は宇宙にこれくらい存在するということはわかっているのだが、その正体はまったく不明で、世界中で正体解明のために沢山の実験がおこなわれている。実験の名前もさまざまで、イタリアのグループは、ダークマター（DArk MAtter）とイタリア語の貴婦人（実験代表者は確かに女性だ）からとってＤＡＭＡという名前の実験をおこなっている。ＬＵＸ（Large Underground Xenon）というアメリカの実験は、高純度の銅や高性能光検出器など確かに贅沢（ぜいたく）な実験装置となっている。

国内に目を向けると、最大の実験はＸＭＡＳＳ（Xenon detector for weakly interacting MASSive particles）と名付けられている。ＬＵＸと同様、キセノンという物質（Xenon）を使っているため、Ｘで始まっている。あとはキリスト教のお祭りの名前に近くなるように、英単語をうまく並べて略称がＸＭＡＳＳとなっている。僕が次の実験を考えたときには、年末を思わせるＸＭＡＳＳの次は新年でしょう、ということでＮＥＷＡＧＥ（NEW-generation WIMP search with an Advanced Gaseous detector Experiment）と名付けた（最初はＮＥＷＹＥＡＲとしたかったのだが、どう考えてもうまい正式名が思い浮かばなかった）。最近では、アルゴンという物質（Argon）を使ったＡＮＫＯＫ（Arugon Nisougata Kenshutuki OK）などという和風な名前の実験も始まり、日本のグループも暗黒物質の正体解明に向けて研究の勢いを増している。

暗黒物質の正体がわかってしまったら、名前はどうなるのだろう。もはや性質がわかってしまっているので、暗黒などざっくりとした名前は許されなくなってしまうのだろうか。自分の手で暗黒物質の正体をはっきりさせたいという気持ちで日々研究を進めているのだが、本稿を書き進めるうちに、僕の研究が成功したら暗黒物質という素敵な名を奪ってしまうことになるのでは、とふと不安になってしまった。名について考えるのはここまでにして、研究に戻ることにしよう。

月刊みんぱく 2016 8月号

編集後記

今年は、原爆が落とされて以来71年後にして初めてアメリカの大統領が広島を訪れた記念すべき年となった。また、水俣病公式確認から60年、チェルノブイリ原子力発電所事故から30年、東日本大震災から5年がたち、各地の「負」の遺産が節目を迎えるのを機にこの特集を組んだ。

表紙の写真は、かつてユダヤ人を収容所まで運んだドイツ国営鉄道の貨車。現在はエルサレムのヤド・ヴァシェム（ホロコースト記念館）にあり、エルサレムの森の空中に消えてゆくようにひかれた線路の上にぽつねんとのっている。

ヤド・ヴァシェムはわたしも訪れたことがあるが、もっとも印象に残ったのは、広い敷地内の各所に建立された立派で荘厳なモニュメントや記念館ではなく、美術館に展示されていた1枚の小さな水彩画である。3段に重ねられ、所狭しと並べられた収容所の寝床の様子を描いたものであった。画中に人の姿はなく、銘々の衣類やトランクなどが寝床まわりの狭い空間に置かれ、間仕切りの布もぶらさがっている。外連味なく淡々と写し取られた日常が異様に生々しく、記号でしかない記念碑よりもよほど強烈に心に響いた。日本の大震災直後の避難所のイメージとも重なったからかもしれない。戦後、収容所の屋根裏から発見された一連の絵のうちの1枚だという。画家はアウシュヴィッツで命を落としたが、その筆が遺した遺産には、人間の尊厳とは何か考えさせる威力がある。（山中由里子）

●表紙：エルサレムのヤド・ヴァシェム（ホロコースト記念館）にある、アウシュビッツ行き貨物列車の屋外展示。撮影・菅瀬晶子

次号の予告

特集

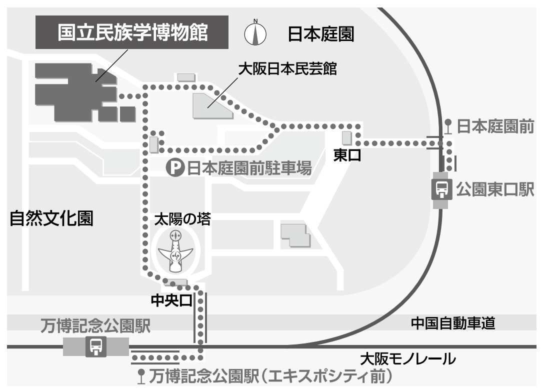
見世物大博覧会

月刊みんぱく 2016年8月号
第40巻第8号通巻第467号　2016年8月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6876-2151

発行人　池谷和信
編集委員　山中由里子（編集長）　河合洋尚　菅瀬晶子　丹羽典生　南真木人　吉岡乾
デザイン　宮谷一款　長岡綾子
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　能登印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
●阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「万博記念公園駅（エキスポシティ前）」「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
●乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/
みんぱくフェイスブック
http://www.facebook.com/MINPAKU.official/
みんぱくツイッター
http://twitter.com/MINPAKUofficial

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

みんなのはくぶつかん　みんぱく

MINPAKU

美術鑑賞は「無視覚流」で。

広瀬浩二郎准教授プロデュースの「さわる展示」が兵庫県立美術館で開催

1989年より兵庫県立美術館でおこなわれている「美術の中のかたち——手で見る造形」展を、今年は広瀬准教授がプロデュースをしました。視覚に障害をもつ人に美術鑑賞を楽しんでもらうとともに、視覚に偏りがちな美術鑑賞のあり方をとらえ直すことを目的とした、作品を手でさわる展示です。

展示では、まずアイマスクをして、広瀬准教授自身による音声ガイドを聞きながら、3つの彫刻作品をさわります。「無視覚流（むしかくりゅう）」と冠した鑑賞術を解説した音声ガイドは、ひとつの作品につき約7分。じっくり時間をかけ、作品の手ざわりや温度を感じていきながら、部分を頭のなかでつなぎあわせ全体像をイメージしていきます。

作品が実際にどのような姿をしているのか気になるところですが、観覧後、作品を来場者に見せるかどうかは大きな議論となったそうです。「最後に見てしまうと、視覚的なイメージや情報が追加されてしまいますので、思い切ってさわった感覚や印象だけをもって帰っていただくことにしました」と広瀬准教授。

もうひとつの大きなポイントは、視覚障害者の美術鑑賞の疑似体験ではないということ。目が見える人も、アイマスクをすれば同じように楽しめるのです。誰もが楽しめる博物館「ユニバーサル・ミュージアム」の考え方を示す、新しい鑑賞スタイルなのです。

広瀬准教授は今後の展開について、今回の兵庫県立美術館での展示や、みんぱく本館の「探究ひろば」にある「世界をさわる」コーナーなどの「さわる展示」の蓄積をもとに、みんぱくで企画展や特別展が開催できればとのことでした。

みんぱく本館「探究ひろば」にある「世界をさわる」コーナー。「じっくりさわる」「見てさわる」「見ないでさわる」という、3つの仕掛けにより、資料をさわることができます

「美術の中のかたち——手で見る造形
つなぐ×つつむ×つかむ 無視覚流鑑賞の極意」
兵庫県立美術館にて　2016年11月6日（日）まで

※会期中、兵庫県立美術館では広瀬准教授による関連のワークショップや講演会がおこなわれます。また、8月7日（日）の「ウィークエンド・サロン」（みんぱく本館ナビひろばで開催）や、10月の「カレッジシアター」（あべのハルカス近鉄本店「スペース9」で開催）でも、関連のお話をするそうです。

みんぱくをもっと楽しみたい人のために——————会員制度のご案内

詳細については、「国立民族学博物館友の会（一般財団法人千里文化財団）」までお問い合わせください。
電話06−6877−8893（平日9：00～17：00）

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館 キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。